

【講演会等報告】

2010年度 第1回 日本文化人類学会（北海道地区）研究懇談会
「私の遍歴：人類学者への道のり」

開催日：2010年7月24日（土） 14:00～18:00
開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 室
主催：日本文化人類学会北海道地区研究懇談会
後援：北海道民族学会

捕鯨問題との出会い

岩崎 まさみ

人類学者が生涯の研究テーマに出会えるかどうかは、研究者人生を大きく左右する。カナダ・アルバータ大学の大学院生であった私は、指導教授からこれを苦も無く与えられた。「網走の小型捕鯨の現状を調べる」という課題であり、その入り口から広い「応用人類学」という分野へ入って行った。博士課程では国際捕鯨委員会をフィールドとして、日本代表団の一員として議論に参加する傍ら、まさに「参与観察」を行うなど、捕鯨問題との出会いは私のDestiny（運命）であった。

(いわさき・まさみ/北海学園大学)

フィールド・ワークの実践における「私」の両義性

野手 修

初めての現場体験からはじまる人類学者のフィールド・ワークについては、その是非もふくめ、既に語り尽くされた感があるが、実際の調査では個々人の体験と文化との遭遇は密接にからみあう。知的発見の過程であるとともに概念化が難しい（それ故に人類学の公的な言説から排除される）偶発的出来事とその実践において不可欠なフィールド・ワークの両義性について、アフリカおよびインドにおける個人的な体験をふまえ概説した。

(のて・おさむ/藤女子大学)

東京・ロサンゼルス・リッチモンド・札幌

桑山 敬己

東京神田に生まれ育った私が、27歳の時にカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に留学して文化人類学を学び、34歳で博士号を取得後、ヴァージニア州のリッチモンド市に

あるヴァージニア・コモンウェルス大学で教え始めたこと、そして38歳の時11年間に及ぶアメリカ滞在にピリオドを打って東京に戻り、さらに48歳で札幌に移住したという経緯を振り返りつつ、人類学について考えることについて述べた。ポイントは、自らの異文化体験と人類学を通じた学問的実践が、切り離しがたく結びついているということにあった。

(くわやま・たかみ/北海道大学)

2010年度 第2回 日本文化人類学会（北海道地区）研究懇談会 「私の遍歴：人類学との関わり」

開催日：2010年10月30日（土） 14:30～17:30
開催場所：北海学園大学 大学院棟C31 番教室
主催：日本文化人類学会北海道地区研究懇談会
後援：北海道民族学会

食からみたモンゴル遊牧世界

石井 智美

ヒトが生きる上で欠かせない食には、時代等の影響で変わり易い部分と、日本人における米への強い嗜好性のように、民族の核として変わり難い部分があると思われる。

モンゴル遊牧民の食の特徴は乳・肉の割合が高く、野菜や果物の摂取がほとんど無いことである。泌乳量の多い夏季は乳製品の摂取が多く、冬季は肉の摂取が増えるという明確な季節性があった。夏季には成人男子では、1日のエネルギー摂取量の約70%を乳製品から摂り、まさにモンゴル遊牧民は「乳を食べる」人々なのだ。しかし1999年から3年続いた寒雪害で家畜にダメージを受け、自家製乳製品の製造が出来なくなった食は小麦粉で補われた。寒雪害以前に比べ、小麦粉の消費量は2倍にも増えた。そうした中で、民族飲料である馬乳酒の大量飲用によって、乳製品の摂取割合が高いという伝統的な食の形態が維持されている。しかし現金経済へ組み込まれ、土地の私有制がスタートしたことによって、モンゴル遊牧世界が今後大きく変化する可能性があることを報告した。

(いしい・さとみ/酪農学園大学)

平和の人類学への道

小田 博志

1999年に旧ユーゴスラヴィアのコンヴォオで滞在した経験から、私は人類学的な平和研究に関心を持つようになった。この発表では、そのときから今日に至るまでの道のりを語った。こ

ここでは紙数の関係で結論だけを述べるにとどめたい。「平和の人類学」を具体化するには、いくつかの視点の切り換えが必要である。ひとつは戦争・紛争中心の見方から、平和をポジティブなものとして捉える見方への転換。もうひとつは構造機能主義的社会観から関係論的な社会観への転換。人類学的な平和研究の少ない先駆例をひも解くと、周囲から閉じ、文化的に均質で、変化の乏しい小規模の集団を前提に、それらの内で比較的非暴力的と思われるところの事例研究が主になっている。しかし、実際の社会のあり方に適した研究を展開するには、こうした構造機能主義的な前提を外して、「他と関わる社会」・「他者との関係性」への視点を導入することが必要である。平和を社会と社会とのあいだ（インターフェイス）で生起する事象として捉えるということである。例えば、よそ者をコミュニティに迎え入れる「歓待」現象は、人類学的平和研究の対象としてもきわめて興味深い。あるいは、紛争後にある社会が敵対する社会と関係を再建する「和解」についても、具体的なエスノグラフィー研究を進める価値がある。また「平和の人類学」をインフォーマルな平和の実践と資源の研究と位置づけることもできる。つまり、政治学が扱ってきた国家単位のリフォーマルな平和から、インフォーマルな場面（日常、地域、民衆、草の根など）へと焦点を向け変えて、人びとが他者との良好な関係を結ぶ（結び直す）実践を、どのようなもの（資源）を用いながら行なっているのかと問うのである。この視点に立ったとき、従来的人类学研究の蓄積からも、豊富な「平和」の実例を発見することができるであろう。

（おだ・ひろし／北海道大学）